

令和2年8月27日

中央環境審議会自然環境部会野生生物小委員会 委員長談話

大阪府立大学名誉教授

(地方独立行政法人大阪府立環境農林水産総合研究所理事長)

石井 実

近年、野生下で確認ができていなかった小笠原固有種のオガサワラシジミについて、飼育下の個体群の繁殖が途絶えた。もし野生下でも絶滅しているなら、日本産チョウ類の種レベルにおける絶滅第1号ということになる。大変残念な結果となったが、ここまでご尽力された関係者の方々には、まず敬意を表したい。

一方で、希少種保全行政に対しては、これを糧に次に活かすことを強く求める。

このたび、環境省から要請があり、このような事態を踏まえて今後の種の保存施策に関することについて、私なりに感じることをまとめた。

1. 検証とその結果の公開

国及び関係機関のこれまでの取組を詳細かつ科学的に検証し、生息域外個体群の繁殖途絶に至った経緯を分析した結果を、今後の種の保存施策に活かせるよう、可能な範囲で公開し関係者が共有することが重要である。

2. 早期の保護増殖事業の策定・実施の重要性

将来的に絶滅のおそれが急激に高まることが想定される種については、国内希少野生動植物種の指定にとどまることなく、保護増殖事業の策定やその実施に一層の人的・予算的資源を早期に投じ、緊急時にも迅速な対応がとれるような体制を構築することを、改めて求めたい。

3. 生息域内保全の重要性

希少種の生息域内での保全がいかに重要で、そして難しいものであるか、改めて認識したところである。特にオガサワラシジミについては、これまで、野生個体群の衰退の主因のひとつであるグリーンアノール等の外来種の駆除などの取組にもかかわらず、今回、野生個体の確認ができなくなってしまい、その後、間もなくこういった事態になった。同様の事態を未然に防止するためにも、希少種の保全に係るあらゆる機関・団体等が連携し、より一層、脅威となる外来種の排除といった生息・生育地の保全の取組を続けていかなければならない。

4. 生息域外保全の技術確立の重要性

生息域外保全が必要となる可能性のある種や分類群において、真に危機的状況になる前に、飼育・栽培下での繁殖技術や野生復帰技術を確立しておくことの重要性を、改めて認識したところである。今回の教訓を活かし、関係機関と連携し、生息域外保全の取組を推進していかなければならない。